社会情報学的権力論のための覚書

── 架空サマリートーク風に ──

井上　芳保

フーコーによると「権力」は関係の網の目の中に微細な形をとって遍く存在しているものであり，特定の実体についてだけ適用すべき概念ではない．社会情報現象にまとわりつくものとしての「権力」を視野に収めずに社会情報学や社会情報調査の方法を考えることは不可能である．文字の使用が権力性を帯びること，コンピューターには存在証明の手段としての機能が潜むこと，データベースには超パノプティコンとしての側面が存在することなどがそれをよく物語っている．従って社会情報過程の起源を脳の外部記憶装置に求める立場は誤っている．情報メディアは，価値中立で無色透明なものとして存在しているわけではなく，実際には常に或る個別具体的な人間関係を背後に有しつつ使用されている．人間の卑俗な欲望の介入という部分を見落としてはならない．例えば，個人の遺伝情報を管理するコンピューター技術が優生思想と結びつきうる危険性，緊張感の乏しい「摩擦係数の低いコミュニケーション」が普及することのさまざまな弊害，電子メディアが作り出す電脳魔宮がルサンチマン処理装置として抑圧された人々の卑俗な願望を吸引することの問題性などの分析が社会情報学的権力論の課題として重要となる．

1．はじめに ── 96 年度の三つの研究企画を振り返って
2．「メディアと権力」論のパラダイム転換へ
　(1)　理論と実証の緊密な結びつき
　(2)　フーコーの微視的権力論の射程
3．なぜ，社会情報過程の起源を脳の外部記憶装置に求めてはだめなのか
　(1)　文字と権力
　(2)　存在証明の手段としてのコンピューター
　(3)　超パノプティコンとしてのデータベース
　(4)　知の構造をめぐるパラドックス
4．社会情報学における権力論の課題
　(1)　個人の遺伝情報を管理する社会
　(2)　摩擦係数の低いコミュニケーションの普及
　(3)　電脳魔宮のなかのルサンチマンの分析へ
5．おわりに ── 今後の学部研究企画のために

INOUE Yoshiyasu　札幌学院大学社会情報学部

1．はじめに――96年度の三つの研究企画を振り返って

1996年度も社会情報学部では多くの研究企画が実施されました．そのうち私がホスト役を務めたものを三つほど数え上げることができます．いずれの際も道外から優れた研究をしておられる方を報告者としてお招きできました．それぞれの報告者からは，社会情報学の今後の展開にとって重要な問題提起がずいぶんと出されていたと思います．しかし，残念ながら時間の関係などのために討論の中でそれらの論点について十分に語りつくせなかったということが少なくなかったように思われます．

今回のサマリートークでそれらの論点を少しでも発掘できればと考えている次第です．このような総括は，研究委員としての，またホスト役としての責任を果たすことになります．しかし，単にそれだけではなく，今年度これらの方をお招きした私自身の問題関心と今後の研究の方向性を簡単に示すことにもつなげてみたいとも思っています．その意味でもこの架空サマリートークは試論となります．いずれにせよ，まずはその三つというのを実施時期の早い方から順に確認しておきましょう．それらは月例の学部研究会（社会情報学部談話会）と夏のシンポジウム，それに「社会情報調査の方法に関する研究会」のことです．

第一は，石川准さん（静岡県立大学助教授）の報告です．今やすっかり恒例となった本学部の夏の「社会と情報に関するシンポジウム」ですが，第6回にあたる今回は7月26，27の両日にわたって行われました．そのパネラーのお一人として石川さんをお招きしました．石川さんは全盲の視覚障害者です．そして社会学者としてすぐれたお仕事を重ねておられます．今回の石川さんの報告は「コンピューターと障害者：アクセシビリティの社会学」という内容でした．その報告内容は本誌前号に掲載されています．なお，石川さんの御著書『アイデンティティゲーム』の学部の皆様への私からの紹介はシンポに先立つ7月の学部研究会の場でさせていただきました．

第二は，亘明志さん（広島修道大学教授）の報告です．秋の深まった11月8日になりますが，第7回の「社会情報調査の方法に関する研究会」の報告者として亘さんをお招きしました．いつもこの研究会は土曜日の午後の時間に実施してきたのですが，今回は学部の月例研究会の第33回という場と兼ねましたので学部のスタッフの多く方の参加を得ることが出来ました．今回の「メディアと権力」という報告は亘さんが『講座現代社会学22巻：メディアと情報化の社会学』【岩波書店】にお書きになった同名の論文の内容に基づいたものとなっています．この報告内容は本誌に掲載されています．

第三は，天笠啓祐さん（DNA問題研究会会員，フリージャーナリスト）の報告です．これはもう雪のぱらついてきた12月5日の学部の月例研究会の第34回の場でした．天笠さんには「優生操作の悪夢――出生前母子情報のコンピューター管理をめぐって」というタイトルの報告をしていただきました．実は天笠さんは，教職員組合の教育研究シンポ企画で「電磁波はなぜ怖いのか？」という報告をする用務で本学に来られたのですが，ちょうど同じ日に学部の研究会があったので急遽お願いし本学部研究委員会の配慮もあって実現の運びとなったものです．天笠さんは『技術と人間』という雑誌の編集のお仕事を長年して来られました．原発や遺伝子組換え食品など科学技術の危険性に関わる問題についての啓蒙書をたくさん出しておられますし，しばしばテレビにも出演しておられます．今回は組合での電磁波のお話も本学部での優生操作の危険性についてのお話も共に現代の科学技術が人間の生活にとって持つ意味の再考を迫る本当に意義深い内容でした．

実はこれら三つの他にも全学的なものに対

象を広げたり，過去に遡ったりすれば，私がホスト役を務めた企画がございます．それらについては文中で適時言及しましょう．

2．「メディアと権力」論のパラダイム転換へ

(1) 理論と実証の緊密な結びつき

話を進めるにあたって，いろいろな方法が可能ですが，本誌に掲載されている亘さんの報告「メディアと権力」の内容に則して問題を整理してみることにします．亘さんは，大学で社会調査実習を担当されたり，広島県北部で差別意識と「社会啓発」の実態に関する丹念なフィールドワークを重ねて報告書をまとめられるなど社会調査の専門家でいらっしゃいますが，同時に理論社会学の分野でも切れ味の鋭いすぐれたお仕事を数多くなさっています．特に最近のお仕事には情報メディアと身体や権力との関連について構造主義の観点から分析する卓抜な視点がみられます．今回の報告では亘さんの理論家としての側面をたっぷりと開示していただけたと思います．

調査の方法と聞いてプラグマティックなレベルの方法のことしか脳裏に浮かばぬのでは社会科学の専門家としての知的センスが疑われることになりましょう．言うまでもないことですが，実証的な調査はすぐれた理論と密接に結びついた時に真に魅力あるものとなりえると言えます．理論と実証は緊密な関係にあります．今回の亘さんのお話しを伺っておりまして，社会情報現象にまとわりつくものとしての「権力」を視野に収めることなく社会情報調査の方法を考えることは不可能であるのではないかと私は痛感致しました．

特に言及しておきたいのは最初の方で提示された，「メディアと権力」論という場合の問題の立て方の根本的な転換，いわばパラダイム転換が必要な状況が到来しているという論点です．これは従来のマスコミ論に一般的な図式の再考を促す指摘なので考えさせられます．つまり「メディアと権力」論と聞くと我々は「マスメディアが情報操作によって愚かな大衆に権力を行使している」というタイプの「第四の権力」論のようなイメージを抱きやすいのですが，そうしたこれまでの一般的認識の枠組それ自体を解体するような「権力」概念を考えてはどうかというラディカルな主張を亘さんはされたのです．

その意味では95年度に実施し，本誌の前々号に記録が掲載されている第6回の「社会情報調査の方法に関する研究会」の報告者である共同通信社記者の松田博公さんによる「オウム報道の問題点」[松田 1996]── こうしたメディア批判の指摘はむろん相変わらず重要ですし，「オウム報道」をめぐる諸々の社会情報現象にこだわり続けることの意義もまた十分に存在し続けているのですけれども ── のマスメディア批判とはやや異なる方向性での「メディアと権力」論の可能性が今回，提示されたといえるのです．

(2) フーコーの微視的権力論の射程

さて，その場合に決定的に重要な位置づけを持って参りますのは，やはりミッシェル・フーコーの提示した「権力」概念でしょう．亘さんは早くからフーコーの権力論に注目して来られました[亘 1980]．フーコーによると「権力」とは関係の網の目の中に微細な形をとって遍く存在している何物かなのです．だから「権力」とは特定の実体についてだけ適用すべき概念ではないことになります．これが第一のポイントです．ただしその上で，そうした「権力」を歴史的に特有の形で編成されて立ち現れてくる現象として把握する必要もあります．これが第二のポイントです．

例えば，『監獄の誕生』[フーコー1975＝1977] で示されている「見られているかもしれない」という脅えや身構えを産み出す装置たる一望監視装置(パノプティコン)．その匿名のまなざしによって形成される「主体性＝隷属性」こそが近代的主体の本性であるとい

うのです．身体刑から監獄に閉じ込めて監視する監視刑へという刑罰の方法の大きな転換という歴史的事態．また性に関わる言説の過剰なまでの広がりという歴史的事態．それらの中にフーコーは近代という時代に特有な権力の編成を見出しています．

またその後に書かれた『性の歴史Ⅰ：知への意志』［フーコー1976＝1986］では19世紀以来の西欧世界は性に関する言説を抑圧するどころか異常なまでに増殖させ多様化してきたという議論もしています．抑圧され禁止されているかのように見えるのは，まさに語らねばならない性の一つの様相に他ならないのであって，「性の真理」へと人々の関心が編成されていくそのされ方の中に近代的な主体の呪縛の影が見られるというのです．これは禁欲的プロテスタンティズムの意図せざる結果として資本主義の精神が生まれたとするウェーバーの観点と重なる内容の指摘だと言えます．要するにこのようなフーコーの微視的権力論をくぐらないとシステム社会としての現代に存在する複雑な権力の網の目はつかまえられないということです．

なお，「性の真理」について補足しておくと現在の我々の周囲にみられる異性愛のみを正しいとする観念の歴史性が問われてきます．同性愛へのタブー視のようなことは我々にとって身近な問題といえます．テレビのお笑い番組では平気で同性愛を笑いの種にしていますが，そうした偏見も歴史的に構築されて存在しているものです．ですからこう言ってもいいでしょう．いわゆるホモネタに笑ってしまう自分とは何者なのかと問いを出し続けるべきだとフーコーの微視的権力論は教えているのではないだろうかと．

3．なぜ，社会情報過程の起源を脳の外部記憶装置に求めてはだめなのか

(1) 文字と権力

記録をみていただきますとわかりますが，亘さんは，フーコーに続いて，タックマン，ゴッフマン，レヴィ＝ストロース，アンダーソン，ポスター，ボードリヤールら最新の社会学理論の成果に次々と言及され，それら相互の関連について説明されました．社会学者たちの名前が列挙されるとそれだけでもう情報系の先生方はいやな顔をされるのではと思いますが，列挙するだけの意味はあるのでして，これらの人々は皆いずれも社会情報学がメディアを把握する方法について根源的なところからの再考を促すたいへん刺激的な指摘をしているのです．

例えば，レヴィ＝ストロースがナンビクワラ族のフィールドワークをしていて「文字」についてそれが単に知識や情報を伝達するものではなく，権力を伴っている事実を発見したことを亘さんは指摘していました．この論点をまとめた論文もあります［亘 1985］．要するに「文字」は誰にも読めることにばかりに意味があるのではなくて，特定の人間にしか読めぬことに意味がある場合があるというのですね．読める者と読めない者の差異が発生すれば，そこに権力関係も発生することになります．そして他者を支配したい，思い通りに動かしてみたい，というのは人間のたいへんにあさましい基本的欲望の一つなのだろうと思われます．

レヴィ＝ストロースがめざとく気づいたように「文字」が価値中立的なものだとはとても言えません．数多くの歴史的事実はそのことを物語っています．社会学者にはそうした事態はたいへん気になるわけです．そして問題は「文字」ばかりではあるまいと思われて参ります．どのようなものであれ，情報メディアは無色透明なものとして存在しているわけではなく，常に個別具体的な状況の中で使用されるのであり，その背後には何らかの人間関係が必ず存在しています．そこには必ず人間の卑俗な欲望が介入するのです．とすると，社会情報学においても欠かせない視点を亘さ

んが今回，紹介して下さった『悲しき南回帰線』[レヴィ＝ストロース 1955＝1971]に読み取り得ると考えられるのです．

(2) 存在証明の手段としてのコンピュータ

実は情報メディアが無色透明なものとして存在しているわけではない，それは常に或るなまなましい人間関係を背後に有しながら使用されるのであるという今述べた論点に深く関わる問題について夏のシンポジウムでの石川さんの報告［石川 1996］においても言及がありました．例えば次のような発言を記録の中にみつけることができます．「コンピュータが使えるか使えないかということは，人々に対して価値の序列化を与えるものさしとなります．つまり使える人には価値を与え，使えない人からは価値を奪い取るような機能を果たしうるものとして，コンピュータはあると思います」(38 頁)．「コンピュータが使えるということが価値，そこのところが価値づけられてしまうということがあるのではないかという危惧も覚えます．『人々の社会性とか政治性というものを脱色してしまうような機能としてのコンピュータ』といってもいいかもしれません」(38－9 頁)．

石川さんの報告テーマは「コンピュータと障害者」というものでしたが，お話の最後の方は次第に障害者にとってコンピュータという難しい機械を使いこなせるということ自体が「無力化した自分が有能さを取り戻したかのように錯覚できる」機能を果たしているという社会学者としてのシニカルな分析になって参りました．石川さんは「商品としてのコンピュータが持たされている，帯びている特徴として，難しい道具である，つまりその道具を使えることが，操れることがその人の有能さの道具である．ということはコンピュータが使えるということが価値づけられているような道具であってそこが障害者にとって魅力的な道具になっているのではないかなという気がします」(38 頁)という発言もしていました．これについては司会をしていた私の方で「存在証明の社会学のコンピュータ版のようなお話」とネーミングさせていただきました．

つまり「存在証明の社会学」という観点から障害者やエスニックマイノリティの生き難さを鋭く切り込んだお仕事［石川 1992］が石川さんには既にあるのですが，ここでは障害者をはじめ何かの負い目を意識しながら生きている人にとって存在証明の道具としての役割を果たし続けるためにはコンピュータは難しいものであり続けねばならないのではないかという視点となっています．これはかなりいやらしい見方ですね．しかし，そう簡単に誰でも使えるやさしいものになられては実は困るというホンネがマニアックなユーザーの心理にはあるのかもしれません．さらに，商品としてのコンピュータの市場というものもそうした意識の存在に配慮しながら形成されているのかもしれません．ルサンチマン処理装置としての「難しい道具」の難易度保持，それこそ情報資本主義を支える本質的要素といえるのでは？．実は石川さんのたいへん鋭い指摘が引き金となって私は司会をしていてその場でいろいろなことを思いついてしまいました．

石川さんのお話に触発されてアイデアが浮かんできたルサンチマン論の情報社会版については別の場で全面展開するつもりですが，さしあたりここでは「存在証明の手段としてのコンピュータ」という視点から情報メディアの普及という社会情報現象を捉えてみる必要があるということをおさえておきたいと思います．メディアの使用の背後には何らかの人間関係が必ず存在しています．人間の卑俗な欲望の介入という部分を見落としてはならないのです．

(3) 超パノプティコンとしてのデータベース

亘さんの報告に戻りますと，フーコーの権力論を活かし，情報メディアが或る権力効果

を発揮してしまっている好例としてこの学部の多くの皆さんにとってたいへん身近なものも挙げられていましたね．そう，データベースです．これはマーク・ポスターが『情報様式論』[ポスター1990＝1991]においてデータベースとはあの一望監視装置，パノプティコンではないのかと疑っている点に触れて展開された論点です．それもただのパノプティコンではなく，完全無欠なパノプティコン，つまり超パノプティコンだというのです．ポスターも相当にシニカルな人のようでして，データベースという現象を近代的啓蒙の夢の具現化したものと捉えています．もちろんこの「夢の具現化」という言い方には批判的なトーンが込められています．フーコーが性的欲望の装置として機能を有するに至った近代のセクシャリティに関わる言説空間を皮肉る時の「知への意志」という表現とニュアンスはよく似ています．

ただ亘さんの報告の流れにおいてはこのポスターの見解についてはあまり深入りしていません．というよりデータベースが超パノプティコンであるからこそ，実は逆説的なことに監獄のようなものとしてのパノプティコンの権力は消滅してしまうのであるという趣旨の観点を強調しています．これはボードリヤールのフーコー批判や大澤真幸さんの主張を手がかりにするとそうも言えるというお話でした．亘さんにはこの論点をまとめた論文もあります[亘 1982]．確かにボードリヤールの提出しているテレビ＝ヴェリテの例やハイパーリアルに関わる言及は面白いですね．フーコーのパノプティコンモデルは既にわが国の社会学者に広く流布していますから，それとは少し違ったことを言ってみたいという願望は多くの人にあると思います．その意味でハイパーリアル論のようにパノプティコンモデルが説明力を有したモダンを超えることになるとの観点，モダンの権力の基本型の終焉を意味しているのではとの観点にひかれる人は少なくないでしょう．

それにフーコーのパノプティコンモデルを使って社会情報過程をどのように説明していくことができるのかという段になるとまだ決め手がなくて，みんな模索しているという事情もあるのではないのかと思います．ですが，モダンというものがそう簡単に終焉するものであるのかという疑いは現在の社会システムの作りを考えると当然なことながら出てきます．プロテスタンティズムの倫理をベースに展開されてきた禁欲のエートスと資本主義の精神はここに至って果たして本当に姿を消したのかとの疑問が残るわけです．例えば，匿名のまなざしによって形成される「主体性＝隷属性」が近代的主体の病理は様々な形をとって出現しています．現に「見られているかもしれないという脅えと身構え」を抱いた人間は実にたくさん我々の回りに存在しています．振り返ってみますと亘さんの言及もパノプティコンモデルのポストモダンにおける妥当性というこの論点に関してはずいぶんと慎重でした．電子メディア社会に特有の匿名的権力の分析は，今後さらに新たな理論的視点を導入しながら進めるべき課題でしょう．

ちなみにデータベースに関して触れておきますと，データベースが無前提に便利なものというデータベース万能論的発想の意外な落とし穴への言及と思われる指摘として石川さんから「検索コストと記憶コスト」という興味深い問題提起がありました[石川 1996]．視覚障害者の立場からしてみると検索するより記憶した方が早いし，実際に使うのに便利だというのですね．実際の生活者にとってどうかということ抜きに観念的に物事を考えるようになったり，そうした思考停止をいいことに官僚制的都合でシステムが一人歩きを始めてしまうことの弊害にはくれぐれも気をつけたいものです．

この論点に関連しますが，1993年度，第3回の夏のシンポジウムに報告者のお一人とし

てお招きした今田高俊さんが，モダンからポストモダンへの変容について機能効率から意味充実へのシフトという観点から説明されていたのが想起されます．意味充実とはコンサマトリーのことで，生活の豊かさをじっくりと考え直すことです．今田さんによると社会システムが不安定な「ゆらぎ」を体験することは大いに意義深いことのようです．そうした不確実性に耐える思想を今田さんはニーチェに求めています［今田 1994］．官僚制によって画一化されるのを最終的に防ぎうるのはやはり生活者としての日常に埋め込まれている知恵なのではないかと思います．モダンはそれをマヒさせてしまいがちなのですが．

モダンの話題になったのでこの場を借りて少々言い添えておきますと，我々が自明視して疑わずにいる事態の歴史性を問い直すことが社会学の大きな魅力の一つです．近年の歴史社会学においても，古くからあるかの如く思われているものが意外と歴史の浅い，捏造されたものにすぎぬことを明らかにする優れた研究が相次いでいます．例えば，亘さんの報告でもその名の挙げられていたアンダーソンが着目した「無名戦士の墓碑」．墓碑も一つの情報メディアに他ならないのですが，アンダーソンはそこに潜むナショナリズム形成と「想像の共同体」の連関を暴いたわけです［アンダーソン 1983＝1987］．ちなみに心情的共感の絆は戦争を残忍化するといえます．傭兵の場合とは比較にならぬ程に愛国心に基づく近代の戦争は残忍です．そして愛国心のために闘う国民の形成は，あのナポレオンが「自由・平等・友愛」の理念を暴力的にヨーロッパに広めようとした時以降の現象にすぎないのです．

近代の国民国家が必要とした「想像の共同体」は電子メディア社会においては特有の新しい形態をとって生成されているのではなかろうかということが次に考えられます．いやしくも社会情報学の一環として社会情報調査が実施されるのなら，例えば，匿名性の保障されたコミュニケーション空間の社会的機能は注意深く考察する必要があろうと思うのです．つまり具体的に言うと「インターネットをめぐる権力分析」といったテーマ設定が必要になるわけです．

(4) 知の構造をめぐるパラドックス

そう言えば，比較的最近の学部研究会でのことですが，社会情報過程を説明するに際して「子宮の大きさの生理的制約」があり，胎児の段階で脳のサイズをこれ以上大きくすることはできないから，脳とは別に外部記憶装置が必要になった，それが社会情報過程というもののそもそもの起源となったという趣旨の話をされた方がおられました．学内の方でした．これはいくつかの点でかなり問題を含んだ見解ですが，何より指摘しておかねばならないのは図書館のような情報貯蔵の倉庫というイメージで社会情報過程を把握する発想に立っているという点です．社会情報過程というのはそのように静態的な単純なものではないと思います．またそれはもっとなまなましい，何か人間の高尚ではない様々な欲望が渦巻くものとして考えねばリアルには捉えられないと思うのです．

ここまで読み進めて来た方からはそんなことは当然ではないかとの声も聞こえてきそうです．実はそういう声が出てくればこの試論は成功したことになるのです．以上に述べてきたことから，社会情報過程を「脳の外部記憶装置」に起源を持つもの，或いはメディアは単に価値中立的なものとする素朴な観点に立脚する社会情報学はほぼ完璧に破産宣告されたことになるのではないかと思います．データベース自体は価値中立的なものという素朴な観念から離脱して，それが意図せざる結果としてどのような社会的機能を担うことになるのかと考え始めることが社会情報学的権力論においては肝心なのです．

その「社会情報＝脳の外部記憶装置」起源

論を語った方には申し訳ないのですが，社会情報過程というものがそのように静態的なものではないことについて理論的な指摘を少しだけしておきましょう．これはすでに一昨年になりますが，1995年10月20日に本学にお招きして本学部の学生たちを主な受講者にして「高度情報化社会とネットワーク」という講演――残念ながらその記録はないのですが――をしていただいた正村俊之さんが「情報と知」という論文［正村1992］で示していることです．

そこで正村さんは「高度情報化によって我々の知はかえって貧困化する」という一見すると，たいへん奇妙なことを述べています．これだけ聞くと何とまたヘンなことを言っているのかと首をかしげる方が少なくないと思います．どういうことかと申しますと，これは知の構造というものがそんなに単純ではないことに由来して起こる事態なのです．つまり，情報には①「知らないことを知らせる」機能という常識的な機能以外に，②「知らないということを知らせてしまう」機能（未知の扉を開いてしまう），③「知らせないために知らせる」機能（相対的無知を生む）も存在しているというのです．

このうち③の「知らせないために知らせる」は何かあまり本質的ではないことを知らせることで本質的な何かが隠蔽されるような事態です．②の「知らないということを知らせてしまう」は，或ることを知ってしまったために多くの謎に満ちた混沌とした世界に足を踏み入れてしまって，次々と新しい問いが生まれてくるというような事態です．これは我々の「知る」という行為の基本構造に規定されて発生してしまう問題です．全てについて「知る」ということは我々にはありえないのですから．②においても③においても「我々の知はかえって貧困化する」ことが起きえます．いずれもデータベースを価値中立的なものと考える前提からはけっして見えてこない問題領域です．

なお，正村さんの重厚なお仕事はどれもこれも社会情報学の今後の展開にとって示唆深い内容のものであり，社会の情報化の意外な側面に切り込む知的インパクトに満ちています．例えば，一見，コミュニケーションの距離を縮めるかに見えるニューメデイアの普及によってかえってコミュニケーションの距離化が生じてしまう側面もあるとする最近の論文［正村1993］で提示された論点もじっくりと検討してみる価値を持っていますが，今回はあまり立ち入らないでおきます．

4．社会情報学における権力論の課題

以下では，今まで述べてきたことを踏まえると社会情報学における権力論の課題としてどういうことが考えられるのかということについて大まかなスケッチを試みてみたいと思います．フーコーの微視的権力の問題もありますが，従来型の権力の問題も当然ながら含まれて参ります．無色透明ではない社会情報過程に関わる権力の問題はむろんここに挙げるものだけではないのですが，さしあたって自分にはこんな事が気になっているという覚え書きです．

(1) 個人の遺伝情報を管理する社会

天笠さんの報告については，まだ文章化した記録がありませんので，私の当日のメモや御著書の『優生操作の悪夢』［天笠1996］の記述を参考にして紹介していくくらいしか手がないのですが，――残念なことに研究委員会として紀要に記録に残す計画を立てているとは今のところ聞いていません――たいへん興味深い内容でした．そしてこう言ってよければかなり恐いお話だったとも言えます．

すなわち「優生操作の悪夢――出生前母子情報のコンピューター管理をめぐって」というタイトルが示しますようにデータベースが実際にどう利用される可能性を持っているのかに関わる問題を指摘しています．データ

ベースは確かに便利なのですが，便利なだけに様々な権力的意図の介入する装置ともなりえるということを天笠さんは遺伝病の情報というなまなましい実例を通して示して下さったと私は受け止めています．

遺伝子の解読が進み，どの遺伝子がどの病気と関連するのかということが次第に分かって参りました．今の医学によっては不治の病というものも残念ながらいくつかあります．そうした病気に将来，確実にかかるであろうことが遺伝子を調べればわかってしまうというケースが実際に出現しています．そのことを本人に知らせることが招くであろう帰結について天笠さんはいくつかの具体例を示しながら説明して下さいました．また優生思想がそこに入りこんでくる危険性について，或る遺伝子を有する家系を排除してしまう可能性の問題と絡めて説明して下さいました．

『優生操作の悪夢』の第7章は「出生前管理」となっていまして，国家レベルで「早期発見・治療」が推進されつつあるということを戦後の母子保健行政の経過を辿って示しています．1977年の国による遺伝相談事業の開始，79年の養護学校義務化，先天異常のモニタリングシステム研究班のスタート，そして82－3年には優生保護法改正の動き等々という具合です．例えば，85年に厚生省が改定作業に入った母子保健法の改正案が示されていますが，これはかなり戦慄すべき内容といえます．天笠さんは「ここで描かれているシナリオは，これまでより一歩進んだ段階を目指したものである．母子手帳の交付や母性健康診断は「障害の発生予防」を女性の管理を通して行おうとしているばかりではなく，遺伝や家系の管理を通しても行おうという内容を含んでいる」(129頁）とまとめています．

さらに「コンピュータ管理は母子管理から一層進み，家系・遺伝管理の流れを必然化してしまう」(131頁）というのです．そして大阪で，本人の了解のないまま，障害の有無や母親についての詳細な情報が集められ大阪府立母子保健総合医療センターのコンピューターに入力されたことがあるという事実が指摘されています．新生児の検査のための血液濾紙が検査後に他の研究のために流用されたという事実もあったのだそうです．

このように戦後の母子保健行政は，人口の「質的向上」を目指して，次々と管理を強めていったわけです．「質的向上」のホンネは障害者の排除です．早期発見・治療から始まる母子保健政策の過程はナチスの時の優生思想と本質的に違わないのではないかと思われます．むろん民主主義社会ですからナチスのように露骨にはできません．それは一見ソフトな形をとっていますが，ここでいう「よりすぐれた人口」はあくまで産業社会の都合に基づくものにほかならないのです．データベースが軍事的要請から生まれたものである事実を我々は忘れてはならないですし，データベースで検索されるのが，誰にとってのどのような意味を持った情報なのかに注意する必要があります．

ついでながら触れておくとこうした事態を分析していくには歴史を捉える自分の視点を変換させることが必要になります．例えば，戦後の平和で民主的な装いの国家について戦時動員体制の継続として捉えなおしてみる必要があるという山之内靖さんたちのグループの問題提起している論点はその意味できわめて重要なものです［山之内・コシュマン・成田1995]．現代のシステム社会は一見，豊かな消費社会に違いないのですが，その陰で何か起きているのかを明晰に捉えていく必要があります．

ともあれ，天笠さんによって，国家による国民総管理システムが構築されていく過程について事実に基づいてたんたんと説かれるお話を伺っていて，私は社会情報学が社会情報過程を捉える時，何を見逃してはならないのかということが次第にクリアーになってきた

気がします．フーコー流の微視的権力の問題もさることながら，支配的な大文字の国家権力との関連で社会情報現象を捉えていくことも必要です．鋭い眼力が求められているのです．

(2) 摩擦係数の低いコミュニケーションの普及

次に日常的なコミュニケーションの話です．個人的なことですが，電子メールのユーザーに昨年からなりました．これはたいへん便利で研究会の連絡はじめちょっとした雑用的連絡等々に日々活用しています．電話とは異なって相手のなまの声が聞こえるコミュニケーションではありませんので，よけいなことを気にせずきわめて気楽に発信できます．あまりかしこまらなくてもいい点は手紙とも違います．経験的に振り返ってみると電子メールではどうもつい饒舌になってしまう傾向も現れているようです．

それからインターネットによるアクセスというのも研究室のパソコンを使って時々やっております．この前は学生たちと一緒に「私立　少女小中学校」というちょっとアブナイ感じのホームページに張られたリンクを次々と辿って，ロリータはじめSM系マニアの集う場所に辿り着きました．相当にグロテスクなものも見られまして，なかなか楽しい体験でした．これも誰かの眼を気にするということなしに容易に出来てしまえたことです．

電子メールやインターネットという電子メディアがどのように我々の生活を変えていくかを考えていく際にこの気楽に，いとも容易に出来てしまうという特質がくせものなのではないかと実はにらんでいるのです．日本語に「敷居が高い」という言い方があります．何かその相手とコミュニケーションを取るのに見えない障壁のようなものを感ずるという意味です．誰にとっても威圧感がある相手というのはいますね．威圧感を軽減し，相手との間の敷居をぐっと低くしてしまう効果というものが電子メールやインターネットにはみられると思います．別な言い方をすれば，緊迫感の乏しい，切実さのないコミュニケーションを肥大化させてしまう力を有しているということにもなりましょう．

こうした事態について宮台真司さんのネーミングを拝借すれば「摩擦係数の低いコミュニケーション」ということになります［宮台1996］．彼によるとポケベルやテレクラというのはそうしたコミョニケーションのはしりとなります．資本主義というシステムは倫理とは無関係に次々と人々の欲望を肥大化させることで維持されているのですが，「摩擦係数の低いコミュニケーション」を実現する手段としてのメディアを得てますます元気になるのかもしれません．肥大化する際限のない欲望の処理のために結果的に起きる外部不経済，例えば生態系への打撃はむろんすさまじいわけですが．

そういえば石川さんはシンポジウムの討論の中で自分は視覚障害者と社会学者という二つを兼ねているおかげで双方のインターフェイスをとる役割になることが多いからどちらか一方だけにいる人よりいろいろなことに気づく機会が多いという趣旨のことを話していました．私も討論の中で発言したのですが，このことは「摩擦係数の低いコミュニケーション」にはない切実さでもって一人歩きしがちな情報化社会の弊害を批判していけるという意味で相当な強みとなるだろうと思います．あの「検索コストと記憶コスト」の例はかみしめてみる価値があります．

(3) 電脳魔宮のなかのルサンチマンの分析へ

最後にこの場を使ってもう一つぜひ触れておきたいのは，昨年刊行された西垣通『聖なるヴァーチャルリアリティ』という著作［西垣1996］のことです．ここには社会情報学の今後にとって非常に示唆深い，刺激的な指摘が多々あります．まず情報の定義からしてたいへんユニークです．つまり「情報とは『いざなうもの』でなくてはならない．生物であ

るわれわれの興味を惹く魅力的な対象が，はじめて情報として〈意味〉をもつのだ」(13 頁) というのです．また「20 世紀に成立した〈情報〉という概念とは，本来は生物的な身体性に依拠するにもかかわらず，それを隠蔽し，個々の身体の上に超越的な規範・権力をもたらす社会的メカニズムから生まれたものなのである．そして，そのもたらし方は，不可視であり，形式的である．けれども〈(広義の) 情報〉が本来，ヒトの身体に起因するものである以上，それは何らかのかたちで身体にフィードバックされる．たとえば，ミシェル・フーコーが分析したように，法という言説は，監獄という装置を通じて個々の囚人の身体に権力をふるう」(32 頁) ともあります．

このように生理的な身体性という地点から情報にアプローチしようとするスタンスが私にはたいへん面白く感じられます．これまでのオーソドックスな情報社会論があまり気づけず，不当にも無視されてきた身体領域の問題に西垣さんは切り込んでいると思われます．生身の身体の感じる現実とコンピュータの作り出す仮想現実とには何かギャップがある気がします．例えばこんな指摘があります．「『ヴァーチャルな身体』とは奇妙な身体である．それはいわば，人間の体内の神経系の一部だけを電子機械的に増幅拡張したようなものだ．神経系というのは，本来，呼吸，消化，生殖など，広義の代謝系（物質系）と結びついてこの働きを助け，個体維持，種族保存を支える機能のはずだ．だがここでは代謝系は置き去りにされ，神経系だけが部分的に機能拡張されている．このことはヴァーチャル・リアリティのセンサーやディスプレイをながめれば一目瞭然だろう．嗅覚や味覚といった，化学物質を媒体とし，代謝系に関係のふかい感覚器官は捨象される．そして視覚や聴覚，とりわけ進化史上もっとも後に発達した視覚の機能が一挙に増強されているのだ．(中略) およそ身体というのは固定した静的なものではない．生物は常に環境のなかで自己を再組織化し，自己を創出し続けるダイナミックな存在だ．実際，この営みこそが〈情報〉の生成そのものなのは言うまでもない」(74 頁)．

まさしく代謝系は置き去りにして，神経系の肥大という部分でしか人間の問題が見えなくなってしまっているという事態が近代科学においては起きているのでしょう．そしてその延長上に従来の多くの情報社会論は埋没しているという気がします．先に触れた「子宮の大きさの生理的制約」があって胎児の段階で脳のサイズをこれ以上大きくすることはできないから，脳とは別に外部記憶装置が必要になったなどという発想はその最たるものです．西垣さんは「『理性』というのは近代の作り出した美しい理念にすぎない．それが常にわれわれを支えているのではないことを，われわれ自身，よく心得ている．たとえ高度な科学技術教育を受けた専門家だろうと，例外ではない」(102 頁) とも述べています．我々は「理性」が虚構であることを実は日常においてよく知っているというのです．これはなかなか含蓄の深い言葉だと思います．

私の理解するところでは，そもそも『聖なるヴァーチャルリアリティ』とは実に皮肉なエスプリの効いた表現です．というのも西垣さんの主張は近代科学のあり方それ自体を批判的に問い直すという問題につながっていると思われるからです．「現代の科学技術的『合理性』は，古代や中世に〈聖性〉が果たしてきたのと同様の社会的機能を果たす．そしてみずからの機能をよく果たすために『合理性』は常にみずからが前近代の〈聖性〉とは異質なことを主張しつづけなくてはならない」(109 頁)．

いささか我田引水的になりますが，私は西垣さんの主張の中から近代社会システムが人間の何を隠蔽してしまったのかというテーマを拾い出せると思います．例えば「たえざる差異化によって欲望をつくりだし，生産—消

費のサイクルを活性化させていくのが，資本主義の基本原則というものだ．それはつねに敗者と挫折感とを生み出しつづける社会ともいえる．自由平等が建前である以上，敗北は個人の努力・能力の不足のせいにされてしまい，人々は黙って屈辱感を噛みしめなくてはならない．近代社会とは隠蔽された差別社会なのである」(89頁）と述べています．

驚いたことに終盤に至るとルサンチマン論とストレートに結びつくような指摘までみられます．電脳魔宮は人々の卑俗な欲望に満ちた世界のようです．「いまや，欺瞞的な平等社会で長い間鬱積してきた怨念ははけ口を見いだす．そこでは恐るべき暴力さえも『聖なるもの』と化すのである」(174頁)．「欺瞞的な平等社会で呻吟する現代人は，サイバースペースで幻像をもとめ『別の自己』に仮装し，悩み多き『日常の自己』を忘れて解放的な気分を味わう．だが，所詮は，この『幻像のダイナミックス』など虚しい夢である．長続きするものではない．サイバースペースとは，すべてを金銭に還元する〈資本〉の論理がまかり通る場所である．それは結局，肉体を持つ一人一人の人間から，みずからの欲望の代価を払わせるように冷徹に機能するのだ」(163頁)．

5．おわりに
——今後の学部研究企画のために

全般的にみて情報社会を語る際の西垣さんの見通しはけっして明るくありません．例えば楽観的な情報社会論に対して容赦のない次のような記述もあります．「『地球上の誰とでも自由に友情の情報交換ができる．市民運動も盛り上がる．すばらしい』と電脳ユートピアンは上機嫌だが，そんなものではあるまい．放置しておけば，インターネットがあらゆる違法取引や暗黒ビジネス（買い占め，投機操作，私設賭博，また麻薬・武器・ポルノ密売など）のたまり場になるのはあきらかだろう」(157頁)．インターネットの利用実態をちょっと考えても確かにこうした事態は生まれているようです．

社会情報学は現代社会において起こっている事実に対してこのようなリアルな認識を持たないとなりませんね．そして社会情報調査とはそうしたなまなましい現実と格闘するフィールドワークとして動的なものであらねばならないと思います．フィールドワーカーは以前にお招きした好井裕明さんの表現を借りると，一つの終わりなき螺旋運動のようなプロセスに携わり続けねばならないのでしょう[好井 1994]．ぎりぎりの緊張感のある場所に身をおき続けることで初めてフィールドワークは「生きられた」ものとなるのです．

私としては，以上に取り上げてきた，これまで本学にお招きした方々やただ今，紹介した西垣さんの優れた分析に大いに刺激されながらこれまで続けてきたルサンチマン研究の延長として，情報資本主義社会における，或いは電脳魔宮のなかのルサンチマンの分析へと歩を進めていきたいと考えています．その具体的成果は近いうちに公刊したいと思っていますので今しばらくお待ち下さい．

こういう場を借りてお話しておきたいことはまだまだありますが，言い出すと切りがありませんので取り敢えず，今回のサマリートークはこれくらいでおしまいということにしておきましょう．社会情報学部ができて6年になります．初代学部長の田中一先生のご尽力もあって社会情報学会も出来ました．社会情報学（部）のさらなる発展を望みたいですし，そのためにも今後の学部研究企画をますます活性化していきたいものです．私と致しましては個人的にも研究委員としても，微力であれこれからも精一杯よい仕事をしていきたいと願ってやみません．

参考文献

天笠啓祐 (1996)『優生操作の悪夢——医療によ

る生と死の支配』増補改定版　社会評論社
アンダーソン．B　(1983＝1987)　『想像の共同体』白石隆・白石さや訳　リブロポート
フーコー．M　(1975＝1977)『監獄の誕生』田村訳　新潮社
――――　(1976＝1986)『性の歴史Ⅰ：知への意志』渡辺訳　新潮社
今田高俊　(1994)『混沌の力』講談社
石川　准　(1992)『アイデンティティ・ゲーム――存在証明の社会学』新評論
――――　(1996)「コンピュータと障害者――アクセシビリティの社会学」札幌学院大学社会情報学部編『社会情報』6巻1号所収
レヴィ＝ストロース．C　(1955＝1971)『悲しき南回帰線』室訳上・下　講談社
松田博公　(1996)「オウム報道の構図とその問題点」札幌学院大学社会情報学部編『社会情報』5巻2号所収
正村俊之　(1992)「情報と知」川崎ほか編『社会学の宇宙』恒星社厚生閣所収
――――　(1993)「高度情報化社会のコミュニケーション――コミュニケーションの距離化とその歴史」大蔵省財政金融研究所編『フィナンシャル・レビュー』26号所収
宮台真司　(1996)「見当違いの倫理主義を排斥せよ――インターネット社会がもたらす社会システムの危機」『へるめす』62号岩波書店所収
西垣　通　(1996)『聖なるヴァーチャル・リアリティ』岩波書店
ポスター．M　(1990＝1991)『情報様式論』室井・吉岡訳　岩波書店
亘　明志　(1996)「メディアと権力」講座現代社会学22巻『メディアと情報化の社会学』岩波書店所収
――――　(1985)「文字と権力――レヴィ＝ストロースの仮説をめぐって」『広島修道大論集人文編』26巻1号所収
――――　(1982)「権力のシュミレーション――ボードリヤールのフーコー批判をめぐって」『広島修道大論集　人文編』23巻2号所収
――――　(1980)「M．フーコーの権力分析と社会学的課題」『社会学評論』31巻1号所収
山之内靖，ヴィクター・コシュマン，成田龍一(編)　(1995)『総力戦と現代化』柏書房
好井裕明　(1994)「螺旋運動としてのエスノメソドロジー――〝生きられたフィールドワーク〟のラディカルな方法として」札幌学院大学社会情報学部編『社会情報』4巻2号所収